

『通俗宋史太祖軍談』の

譯者松下氏による増補・引用部分について

川 浩 二

一、はじめに

『通俗三國志』から始まったいわゆる通俗軍談の出版は、元祿年間（二六八―一七〇四）から寶永年間（二七〇四―一七一〇）にかけて一つのピークを迎え、その後享保年間（二七一六―一七三五）にも『通俗兩國志』など數點が出版された。

『通俗宋史太祖軍談』二十卷は享保四年（二七一九）の刊行で、この時期の作品にあたる。通俗軍談には中國の歴史小説の翻譯と、日本で獨自に史書から制作されたものがあり、『通俗宋史太祖軍談』は、歴史小説『南北兩宋志傳』のうち前半部である『南宋志傳』を原著とする翻譯である。このことは徳田武氏の研究によりすでに判明してお

り、『對譯中國歷史小説選集』にまとめられている。

しかし一方で不明な點も多かった。譯者については、序の署名に「尾陽舍松下氏採筆浪華瑞亨堂」とあるのが知られるのみでそれ以上のことはわかっていなかった。また『通俗宋史太祖軍談』の譯文には、原著の文章に對して増補した部分があることは指摘されていたが、それが譯者のどのような意圖や態度に基づき、どのような手法によつて行われたものであるかについての分析は、かならずしも十分でなかったように思われる。

本論では譯文の増補・引用部分の検討を中心に、松下氏の手法を分析し、その態度と意圖について考察する。また合わせて松下氏に關して、若干の材料を提供するものである。

二、「通俗宋史軍談序」による問題の整理

『通俗宋史太祖軍談』二十卷は享保四年（一七一九）に出版された。大阪の書肆柏原屋清右衛門が出版元であり、作者は松下氏とのみ知られる。

『通俗宋史太祖軍談』は、多くの通俗軍談と同じく、中國の歴史小説を原著とする翻譯であるといつてよい。原著はおよそ嘉靖年間の末頃に制作された『南宋志傳』である。いわゆる原刊本が現存しないことから、本論ではもつとも通用する書名『南宋志傳』で表記する。

『南宋志傳』については、上田望による詳細な検討が行われており、物語文學としては『五代史平話』、史書としては『通鑑節要』系統の書物や『資治通鑑綱目續編』などを用いていると結論づけられている。³² また氏岡眞士はこれに次いで『南宋志傳』について論じ、最初に制作されたときには『南北宋傳』というタイトルであり、『北宋志傳』と合併したテキストであったものを後に二つに分けたものであると論じている。³³

『通俗宋史太祖軍談』の書中では原著を明らかにしていない。また原著の『南宋志傳』の書名と、この物語の枠

組みを「南宋」と呼ぶことを序においても本文においても受け継がず、題名を物語の内容に沿って『通俗宋史太祖軍談』とする。

『通俗宋史太祖軍談』の冒頭には作者の自序である「通俗宋史軍談序」がある。この序に従って本論の検討する問題を整理しておく。³⁴

序は「史記」「漢書」「後漢書」「三國志」に續いて各代には史書が作られたが「信史野史雜然たり」という状況であると説き起こし、そのあと「通俗演義」が「羅氏貫仲」の『三國志』『水滸傳』『西遊記』いらい作られてきたと續ける。

さらに本邦では『通俗三國志』をはじめとする「通俗書」が各代に及んでいるが、「未だ宋朝開國の事蹟有らざるなり」と宋代の通俗軍談がいまだ作られていないことについて述べる。

序がその後に「今書林の需めに應じ、前人の術に倣ひ、宋朝軍談を顯し、以て慰覽に備ふ」と述べるのにしたがえば、出版の企畫は『通俗宋史太祖軍談』の出版元である大阪の書肆柏原屋清右衛門が起こしたものと考えられる。

通俗軍談がジャンル化してからは、作者がみずから企畫

するものと、書肆の企画によるものの両方があったと考えられる。書肆が譯者に依頼した例については『通俗皇明英烈傳』（寶永二年、一七〇五）では書肆林義端が序に自ら岡嶋冠山に依頼したことを書いており、『通俗列國十二朝軍談』（正徳二年、一七二二）の序においても、「浪華書肆敦賀某」が「李下散人」に依頼したとある。⁽⁶⁾

『通俗宋史太祖軍談』の序は以下のように結ばれる。

尚ほ且つ前集に残唐軍談有れども未だ梓に鐫せず、覽る者は此書を熟讀し、而る後に殘唐軍談を閱せば、唐宋の治亂得失、朗然として得んと爾云ふ、

ここでは「前集」の出版企画について述べ、それを「殘唐軍談」と呼ぶ。

序には「享保四己亥孟春 尾陽舍松下氏採筆浪華瑞亨堂」と署名されている。譯者についてはこれによって「松下氏」や「松下瑞亨」と假に呼ばれてきた。明治四十五年（一九一二）に早稻田大學出版部が活字に起こした『通俗二十一史』第十卷所收『通俗宋史軍談』の例言には、「本書の撰者は其序文によりて尾陽舍松下氏なることを知り得

れども、今は其略傳をだに知るを得ざるを遺憾とす」とのみある。また徳田武氏の論考にも作者の問題については探求されておらず、『對譯中國歷史小説選集』においても同じである。その後、この問題に取り組んだ研究は發表されていない。

この序から得られる問題としては、まず作者松下氏について可能な限り明らかにする必要があること、他の「通俗書」にふれ「前人の術に倣」うとすることから、宋史を題材とする歴史小説を通俗軍談として完成するまでに用いた手法について検討する必要があること、加えて「殘唐軍談」をふくめた、書肆による連續した出版企画についても検討する必要があるう。

三、松下氏と翻譯の底本について

松下氏について序から判明するのは、「尾陽」とあることから、尾張の人であること、大阪に居をかまえて「瑞亨堂」と名のり、通俗軍談を手がけたことのみである。

そもそも、通俗軍談は京都・大阪の書肆によって出版されたものであり、これは大鹽遯翁が「通俗五代軍談序」（寶永二年、一七〇五）に「盛んなるかな、華洛通俗の書、

大いなるかな、難波軍談の記、比年相續いて、梓に彫刻し、市に流布すること、其數勝^あげて計^{かぞ}へ難し」と述べた通りである。⁽⁷⁾

そして、松下氏が活動した大阪については、江戸期に大阪の書肆によって出版された書物はその多くが『享保以後大阪出版書籍目録』にまとめられており、全體像をうかがうことが可能である。⁽⁸⁾ この目録が残されたのは、享保八年（二七八三）十二月に大阪本屋仲間と行司制度が公認され、組合ができた後には新刊書を審査し記録する慣習ができたためである。

如上の経緯からできた目録であるために、書目の収録範圍は享保九年（二七八四）以降明治六年（一八七三）までであり、肝心の『通俗宋史太祖軍談』の出版記録じたいをこの目録から見出すことはできない。

しかしいわゆる通俗物に關しては『通俗金翹傳』であれば「作者 西田維則（京都）板元 藤屋彌兵衛（高麗橋二丁目）出願 寶曆九年閏七月」とあり、また『通俗好迷傳』であれば「作者 栗原主信（尼崎）板元 河内屋喜兵衛 出願 寶曆九年十二月」と出ている。また本屋仲間の署名には享保八年のものからすでに「順慶町 柏原屋清右

衛門」とある。

そこで同時期に柏原屋清右衛門の出版物をあたると、數種は見いだせるが、中國史と通俗軍談に關連するものは見當たらない。いっぽう松下姓の作者を探ると、目録全體では「松下俊泉」「松下平左衛門」の二人が見出せ、活動年代から見てあてはまるのは「松下平左衛門」のみということになる。

松下平左衛門の著作は二點あり、以下のとおりである。

『古曆便覽』二冊 作者 松下平左衛門 南堀江一丁目 板元 池田屋三郎衛門 呉服町 出願 享保十一年六月十三日

『刪補古曆便覽』一冊 作者 松下平左衛門 尾州板元 伊丹屋茂兵衛 南久寶寺町五丁目 出願 寶曆七年二月

この二者は同じ本の増補である。そこで作者の名の後に載せられたそれぞれの地名が問題になってくる。「南堀江一丁目」というのは大阪での住所であり、「尾州」は作者の籍を表すと考えられ、『通俗宋史太祖軍談』の松下氏と

同じ尾張の出身である。

渡邊敏夫『近世日本天文學史』は、こうした古暦便覽類ははなはだ多く、慶安元年（一六四八）いらいたびたびさまざまな著者と版元により出版されていると述べたうえで、「享保十一年（一七二六）に瑞亭堂松下殷齋なる者が、その後を推算して『授時曆考當卦頭書 増補古暦便覽備考』四冊を著わした」と述べる。⁹⁾

所蔵については書かれていないが、各圖書館の藏書を調査すると、京都大學人文科學研究所藏書に『授時曆考當卦頭書 増補古暦便覽備考』がある。その卷二が増補分であり、卷二末所載の「増補古暦便覽後序」には、「旨享保一十一天仲春瑞亭堂松下殷齋」とある。卷四には「享保十一丙午歲八月 作者 攝州大坂南堀江壹丁目 松下平左衛門書肆 同所 齋藤町 伊丹屋茂兵衛開版」とある。

また、渡邊敏夫は「これ等著作者の中には、經歷不明の人も多いが、天文曆學者というよりは、むしろ占卜を業とする、易者ではなかったか」と豫測している。

さらに東洋文庫所藏の資料のうち、木村正辭舊藏資料の抄本であり、占いのさいの壇の支度について書かれた『龜卜棚壇并飾次第』には、「享保十年松下殷齋、同十三年平

興貞、同十八年平勝安、延享四年平勝峰傳授の奥書あり」とある。¹⁰⁾これが先の松下平左衛門、殷齋と同一人物なのであれば、占卜に關わる經歷をもった人物ということになるであろう。

上記の情報を合わせると、松下氏の略傳は以下のようになるだろう。松下平左衛門、號は殷齋、尾張の人。享保年間在世。大阪に移り瑞亭堂と稱した。曆法占卜に詳しく、著に『通俗宋史太祖軍談』があり、『古暦便覽』を増補した。現在のところ、これ以上のことは判明しておらず繼續した調査が必要である。

『通俗宋史太祖軍談』の全書は原著である『南宋志傳』が五十回であるのに對し、二十卷九十七則と中途半端な数になっているためもあって、則の區切れ位置が原著と重なることは少ない。『通俗宋史太祖軍談』の各則目は七字二句で構成され、「歷代帝王承統略 竝 宋朝帝業興起之事」のように「竝」「事」がつけられる。そのさい則目は一部原著の回目を襲うことがある。

現在知られるかぎり、『通俗宋史太祖軍談』と同じ位置で回が切れる版本は見出されず、通俗軍談が原著の區切れ位置を改變する例は『通俗三國志』にすでに見られること

から、現存する版本に近いものを底本としたと考えられる。『通俗宋史太祖軍談』が底本とした『南宋志傳』の版本については、徳田武氏がつとに基礎的な検討を行っており、そのさい三種の版本が検討されている。内閣文庫藏『新刊出像補訂參采史鑑 南宋志傳通俗演義題評』（以下、通稱に従つて世徳堂本とする）、内閣文庫藏『全像按鑑演義南北兩宋志傳』（同じく三臺館本とする）、宮内省書陵部藏『新鐫玉茗堂批評按鑑參補出像南北宋志傳』（葉混池本とする）である。徳田武氏は漢文部分がそのまま引用されている詔勅・書牘などの部分を取り上げて文字を比較することでどの書を利用したかを検討し、あらためて三者には「特に意味内容が大きく變わってしまうという重要な異同は無い、といつてよい」とした上で、結論として三者ともに用いた可能性があると結論づけられている。

本論も複数の底本の利用を必ずしも否定するものではないが、少なくとも版本間に決定的な違いがある部分は存在しており、それは直接『通俗宋史太祖軍談』に影響している。『通俗宋史太祖軍談』の末尾はこのように終わる。

公侯衆臣ノ尊キヨリシテ、下黎民ニ及ブマデニ、擧ツ

テ稱賀シ、唱ヘテ曰ク、陛下ノ恩徳枯骨ニ及ブ、是禹湯ノ心ナリ、何ゾ天下ヲ憂ヒンヤト、是ヨリ天下一統シ、萬國江山宋朝ニ屬シ、禮樂仁義全ク備ハリ、將來三百餘年ニ及ンデ、道徳文物大ニ興リ、黎民堯舜ノ庭ニ遊ビ、百姓湯武ノ恩澤ニ誇ルハ、皆太祖神徳皇帝、開國垂統ノ大規模ナリ、

『南宋志傳』の版本のうちもつとも古い形を残すと考えられる三臺館本と比べると、三臺館本には第五十回の結びに一書を總括する詩や言葉は見られず、合刻されている『北宋志傳』につながる。周の後主の訃報を聞いた宋太祖趙匡胤が喪を發し、「是歲、周後主宗訓殂於房州。太祖聞知、服發哀、爲之罷朝十日。因遣使臣迎其靈柩、葬於慶陵之側、號曰順陵。」とだけあり、これで第五十回は終わってしまう。これに對して、後發の葉混池本の系統を引く版本には、末尾に以下の一段が加わる。

此後一統承平、不復贅詞、後人有詩爲證。一統江山屬宋朝、士卒常驅帶羽雕。南征北討將夫饒、臣勢仰帝如湯禹。

清代の版本も含めれば、じつさいにはこの詩を載せるテキストの方が多いと考えられる。これはおそらく『北宋志傳』に對する獨立をはかつて、他の小説の末尾にしばしば詩が付けられていることを踏襲したものであろう。

『通俗宋史太祖軍談』の末尾は必ずしもこれをそのまま讀み下したのではない。しかし「天下一統シ、萬國江山宋朝ニ屬シ」とある部分が詩の第一句をふまえたことは明白である。

他にも原著の版本相互で異なる場合に、葉混池本の系統に近い例がある。『通俗宋史太祖軍談』卷五第二三則「柴榮姑夫遇郭威 竝 匡胤合血光之卜 事」には、以下の短い一段がある。

鄭恩コレヲ拜謝シテ、關西ニ歸リケル、斯テ武州ノ界ニ至ツテ、匡胤ニタヅネアヒ、魏府ノ本末ヲ備ヘ説ク、

これは葉混池本では以下のようにある。

卻說鄭恩上路、望關西進發、到武州界、尋見匡胤、將

『通俗宋史太祖軍談』の譯者松下氏による増補・引用部分について（川）

送柴榮到魏府投見本末、道知一番、不題。

これに對して三臺館本では以下の通りである。

卻說鄭恩辭去柴榮、復來關西、到武州界、尋見匡胤、道知前事。

これを見ると、「魏府ノ本末」の語は譯者が足したのでなく底本の違いによるものであることが分かる。

底本については、少なくとも葉混池本など、前掲の詩が存在する版本を最低でも一種は利用しなければ成立しないことが指摘できよう。

四、譯文における『水滸傳』の攝取

『通俗宋史太祖軍談』の文を、『南宋志傳』と比べてみたとき、譯さずに削除されている部分として目立つのは、書中の詩詞の類である。もともと『南宋志傳』には回頭回末に詩が載せられることが少なく、文の途中に詠史詩が挿入されることのほうが多いが、これらの詩の大半は削除され、場合により地の文の中にとけこませられていること

は、上述した全書の末尾にも見える通りである。

さらに、後半の四分の一以降からは、原著で頻繁に表れ、それまでは比較的丹念に拾ってきた詔書や表も削除される例が多くなる。

それとは逆に、松下氏が増補した部分もあり、それについては徳田武により、状景描寫や歴史の説明などが文中に増補されることと、則の途中や末尾に、地の文から一段下げる書式で「宋史斷曰」などの語に導かれた史論が引用されていることが指摘されている。¹¹⁾

とくに状景描寫については譯者の翻案意識の現れの一つとして、「戦鬪や宴會などの華やかな場面ではその状景描寫を美文によって加える」と述べる。¹²⁾

例として原著第十八回の趙匡胤と蔡順の戦鬪部分が『通俗宋史太祖軍談』卷六・二十八則では極端に潤色されていることが挙げられている。そしてそれは同時期に作られた『通俗兩國志』などの文章に見える翻案意識の表出である、つまり譯者にあたる人物が創作によって付け加えた部分にあたると論じられていた。

しかし、これには典據が存在する。武將の武裝に過剰なまでに筆を費やし、その描寫によって物語の進行がほとん

ど停頓するに至る華麗な描寫は、他の小説に抜きんできて『水滸傳』の最も得意とするところである。¹³⁾

『水滸傳』第十三回「急先鋒東郭爭功 青面獸北京爭武」に見える青面獸楊志と急先鋒索超の戦いは、二人の武裝を詳細に述べる。¹⁴⁾「頭戴一頂熟銅獅子盔、腦後斗大來一顆紅纓」から始まる描寫は、『通俗宋史太祖軍談』卷六の「頭二一頂ノ銀獅子ノ盔ヲ戴キ、腦後ヲ大イナル紅ノ纓ヲ以テ、之ヲ結び」という描寫にわずかな改變のみでそのまま寫し取られている。他の小説から寫したものである以上、かならず無理は出るもので、ここでは「十八折刀」を得意とする蔡順と槍を構えた趙匡胤が戦っているはずが、戦鬪の描寫に移ったところで蔡順に喩えられるのは「七國ノ袁達」と「巨靈神」であり、兩方とも斧を武器とすることで知られており場面に合わない。

これは『水滸傳』の索超が斧を武器とするためである。その點、槍を使う趙匡胤は「三國ノ張飛」と「花光藏」に喩えられていて、もとが槍を巧みに使う楊志だけにこちらはずまくはまっている。

この部分は『水滸傳』を用いていることだけが重要なのではない。該當の場面で趙匡胤は推舉され、觀衆を前に腕

比べをさせられることになる。その場面自體が、推舉されて索超と腕比べをすることになる楊志と重なっているの
で、松下氏はそこまで『水滸傳』を知ったうえでその部分の描寫を用いていると考えられる。注を立てて似た場面が『水滸傳』に見られると述べるかわりに、その部分の描寫を引用しているとも言ひ換えられよう。

筆者の検討したところによれば、『通俗宋史太祖軍談』の人物の武裝、宮殿や軍勢を描寫する部分など、『南宋志傳』に原文にあたる文章に對して潤色されている部分はいずれも、『水滸傳』の描寫に由來している。

卷二・四則の清泰三年正月六日の宴を描寫した部分は、「九重ノ門啓イテ、噦々タル鸞聲ヲ鳴ラシ」から始まる。これは『水滸傳』第八十二回の「九重門啓、鳴噦噦之鸞聲」から始まる一段を寫したものであり、『水滸傳』では梁山泊の一同が天子徽宗の御宴に招かれた華やかな場面にあたる。ここでは皇帝の開く宴である事が重ねられている。

卷三・十則の劉知遠が兵を進める場面の描寫は、「軍兵ヲ九隊ニワケ、其旗ヲ五方ニツラネ、緑沈鎗、點鋼鎗、鴉角鎗ヲ遍ク野ニ布キ」と始まる。これは『水滸傳』第七十六回到童貫の兵を描寫する部分があり、「兵分九隊、旗列

五方。綠沉鎗、點鋼鎗、鴉角鎗、布遍野光芒」からの一段にあたる。

卷五・二十四則には華山の風景を述べた部分に、原著にない部分を追加して「大峰ハ仙掌ト名ケ、觀ハ雲ノ臺ニ隱レリ、上ニハ玉女洗頭ノ盆ヲ連ネ、下ニハ天河分派ノ水ヲ接エ」から續く一段を設ける。これは『水滸傳』第五十九回到、やはり華山の景を「峰名仙掌、觀隱雲臺。上連玉女洗頭盆、下接天河分派水」から續く一段で述べる事に據る。

現在判明しているのは以上であり、いずれも『水滸傳』から單に引用するだけでなく、同種の場面が見られることの分析にもなっていることがうかがえる。しかもおそらく松下氏は『水滸傳』のような小説において、描寫のみを行って物語が進まない部分があることを看破し、それらがときに他の作品と共有され通用するという白話小説の重要な特徴に氣づいていたものと考えられる。

そしてこれは『水滸傳』の日本における受容史にも一つの材料をもたらす。『通俗宋史太祖軍談』は享保年間に作られている。まだ『水滸傳』の譯書は出ておらず、江戸には荻生徂徠、京都には伊藤東涯らがあり、岡嶋冠山が存命で活動していた時期である。活動時期から推測すると、松

下氏は大よそ彼らと同世代であり、後に『水滸傳』の譯解にたずさわる岡白駒や陶山南濤らに先んじて『水滸傳』を讀んでいた一人ということになる。

『通俗宋史太祖軍談』における『水滸傳』の影響は必ずしも大きいものとはいえない。しかし取られている部分は『水滸傳』の中でも後半にまで及び、『南宋志傳』の同種の場面と組み合わせられていることから、松下氏はすでに『水滸傳』をじゅうぶん理解していたものと考えられる。

五、「天命」と「占術」

いっぽう、松下氏が文中に増補した歴史の説明については、その多くは王朝の興廢に關わることを述べているが、個人の傳記を書く部分もある。そのうち目をひくのは卷十五・七十四則における後周の王朴に關する記述である。

王朴、字は文伯、山東東平の人。傳は『舊五代史』卷一百二十八、『新五代史』卷三十一。曆法と天文に詳しく、後世、相術の書『太清神鑑』六卷の作者に擬せられている。『南宋志傳』でも郭威と柴榮のもとで軍師の役割を與えられて活躍する。

卷十五・七十四則には、原著に對する増補が行われてお

り、王朴が世宗柴榮の命によつて欽天曆を編纂したことが書かれ、奏上した表が引かれる。これは『舊五代史』卷一百四十にある。さらにその後には王朴が音律を正したことが見え、これも同様に『舊五代史』卷一百四十五にある。『通俗宋史太祖軍談』全書を通じて個人についてこれほど多くの業績を足した例は他に見られず、これは特殊な扱いと言えるだろう。

王朴に對する扱いの大きさは他でも見られ、一書の後半ではしばしば詔書の類が省略され抄録されるのに對して、卷十三・六十則は、王朴の獻策を、煩を厭わず全て掲載する。

この例から、とくに天文曆法あるいは占術に關わる部分について着目して全書を通觀すると、幾つかの點が指摘できる。

卷五・二十一則では占者苗光異が趙匡胤の前に現れて彼の將來を占う。そのさい原著では「星數書冊」を竝べていたとのみ書かれるが、譯では「一本ノ七曜曆」を置いていたと書く。また占うさいには原著はとくに細部を書かないが、譯では「年月日時ヲ説キ出セバ、老翁五星子平ヲ以テ、一番二細却シ」ている。さらに原著にはない「今只難

星度ヲ過レリ、杖ニテ討タル、責メヲ受ケ、牢獄ノ災ヲ見
ン」という具體的な豫言を行う。もちろん、これは後の文
中的中することになる。

卷八・三十八則では郭威が費博古という占者に占われた
さい、「我レ一鎮ノ地ヲ保ツテ、甚麼事ヲカ成シ得ンヤ、
我只忠義ヲ盡スノ外ニ、慮リナシ」とのみ言っているが、
原著では大業を爲すと占われた郭威は「一鎮のみを治める
身で何をなしえようか。術士の言葉は、信じすぎるのは、よ
ろしくない、ただ忠義を盡くすのみだ」と答える。ここで
は松下氏が郭威の言葉を削っている。

卷五・二十四則は、原著第十六回にあたり、そこには華
山の隱士陳搏（『通俗宋史太祖軍談』では「陳搏」と書かれる）
が登場する。『紫微斗數』『河洛理數』『麻衣相法』といっ
た日本でもよく知られた占術の書の著者に擬せられ、占者
としては書中でも最も著名な人物といえる。

この陳搏がまだ世に出ていない趙匡胤に對して將來の飛
躍を占う。さらに華山の物産の乏しいことから、もし功な
り名とげたあかつきには、租税を免ずるようにと請う。趙
匡胤はこれに應えて「華山出賣」の四字を與えるというの
がこの段の筋立てである。これは原著第十六回に見え、と

くに増加されているわけではない。

その後、卷十五・六十九則では陳搏が再登場し、柴榮の
招きを斷り、詩を残して去る。この部分は原著の第四十一
回に忠實である。ただし松下氏はさらにその後「然ルニ
陳搏、鬼神屈伸ノ祕奧ニ通ジ」から始まる一段を足す。そ
こでは柴榮の命運薄いことをあらかじめ知った陳搏が詩を
残して去ったと述べられ、さらに先の「華山出賣」の話柄
にもう一度ふれる。

ここに述べてきたような改變は、他の人物に關わる部分
に對して特徴が顯著であり、松下氏が「天命」が重要なも
のであると強調し、また占者の扱いを大きくし不利な説を
削っていることにおいて共通する。これは第三節で述べた
松下氏の經歷とも合致する。

六、史論の引用

松下氏は、『通俗宋史太祖軍談』において、原著にない
史論を増補する。その例が最初に見られるのは、卷十・四
十九則の末尾においてである。そこで引かれる「餘姚鄭伯
乾」の史論は、「或人宋ノ太祖ノ天下ヲ得ルハ、果シテ是
天命ナルヤ、抑人謀ナルヤト問フ」から始まる。これはそ

の後、卷十七・八十則の末尾において再び引用されている。

再度引用されている部分では、「宋史斷」の「天下ヲ取ルモノハ、上世ハ力ヲ以テシ、末世ハ謀ヲ以テス」から「是太祖ノ謀ニ與スル者ナリト、云々」と結ぶ文を引いて、その後に明・鄭伯乾の論を置く。

そのさいはじめて鄭伯乾の論が、趙匡胤が天下を得たのは「謀」によるものだと言え、説に對する反論であることが分かる。さらに續いて「綱目斷」を引き、そこで「周主ヲ廢スル」と書くのは太祖の「篡奪ノ罪ヲ著ス」ものであるとするのに對して、宋・呂中の論を引いて太祖の即位はあくまで「天命ノ歸スル所」であると反論する。

これが『通俗宋史太祖軍談』における史論の引用の基本的な形式である。いずれも太祖の即位が天命にあることを唱え、宋の正統を論ずるとともに天命の重んぜられるべきことを説いている。

『通俗宋史太祖軍談』における史書の引用は、基本的には史論の引用に限られ、小説本文に對して、歴史書とは異なる年代に起きたとされている部分に對して訂正するなど、の形で用いられているわけではない。考證ではなく史論を

用いて王朝の正統を述べ、皇帝と朝臣を評價するものといえる。

典據とする資料について見れば、鄭伯乾の史論は單行されている形跡がないため、おそらくは史論をまとめた書から引用したものと考えられる。江戸期によく讀まれた一般的なものとして明の袁了凡こと袁黃の『歴史綱鑑補』が挙げられる。試みに早大所藏の萬曆三十八年雙峰堂刊『歴史綱鑑補』を開くと、卷二十八第二葉に、「鄭伯乾曰、或問宋太祖之得天下、果天命耶、抑人謀耶」から始まる部分が見出せる。

「宋史斷」とされる部分は明・劉定之『宋史論』卷一に基づく。ただし直接には『歴史綱鑑補』のような書物に據っていることも考えられる。『歴史綱鑑補』卷二十八では鄭伯乾の論の直前に載せられている。

「綱目斷」とされる部分は、朱熹『資治通鑑綱目』ではなく、『資治通鑑綱目續編』卷一の「發明」による。

「呂氏中が曰く」の後の部分は、宋・呂中『宋大事記講義』卷二に基づく。ただし、やはりこれもたとえば『資治通鑑節要續編』卷一のようにそれを引用した書籍に基づいている可能性がある。

ここに見えるように、『通俗宋史太祖軍談』において「綱目斷」とされるものが、朱熹の『資治通鑑綱目』ではなく、『資治通鑑綱目續編』に見える史論であることは着目すべきである。朱子の史論が引かれるのは卷十八・八十七則の末尾の一度だけであり、『資治通鑑綱目』ではなく、『朱子語類』卷四十八に基づく。

『通俗宋史太祖軍談』の原著『南宋志傳』は、太祖趙匡胤の南方の平定までを書くものであり、開寶八年（九七五）までのことが書かれる。それに對して『資治通鑑綱目』は五代末の顯德六年（九五九）までで終わるため、『通俗宋史太祖軍談』では卷十七・八十則、『南宋志傳』では四十四回の途中以降は『資治通鑑綱目』の範圍からは外れている。

『資治通鑑綱目』は寛文年間（一六六一―一六七二）に和刻本が作られているが、この和刻本では、『資治通鑑綱目』の扱う以前の時代を同じ形式で書いた明・南軒『資治通鑑綱目前編』と宋元までを含めた『資治通鑑綱目續編』が合刻されており、日本では主にその形で廣まっていたと考えられる。

さらに、そのさいの『資治通鑑綱目續編』は、明・商略

が成化十二年（一四七六）に編纂したさいの姿ではなく、明・張時泰による「廣義」（弘治元年、一四八八）と、明・周禮、字は德恭、號は靜軒による「發明」（弘治十一年、一四九八）を載せたものである。

『通俗宋史太祖軍談』の史論の典據は、正史の他には、『資治通鑑綱目續編』、宋・呂中『宋大事記講義』、明・劉定之『宋史論』、明・許浩『宋史闡幽』、明・正誼齋『宋史筆斷』などに渡る。ただし、先ほども述べたように、これらの論は、全て個別の書物から抜粋してつづり合わせたものとは考えにくい。以下、史論の典據について示しておく。

卷十六・七十九則の「歐陽脩ガ論ニ曰ク、世宗五季ノ亂世ニ出デ」から始まる論は、『新五代史』周本紀第十二に見える。またそれに續く司馬光の論は『資治通鑑』卷二百九十四に見える。

卷十七・八十則の「宋史斷ニ曰ク、天下ヲ取ルモノハ」から始まり、「鄭伯乾ガ曰ク」、「綱目ノ斷ニ曰ク」「呂氏中ガ曰ク」と續く部分については、先に指摘した通りである。

卷十七・八十一則の「宋史筆斷ニ曰ク、臣ハ當ニ忠ニ死

スベク」の部分は『宋史筆斷』卷一の冒頭に見える。

卷十七・八十四則の「綱目ノ斷ニ曰ク、李筠ハ周ノ藩臣ナリ」の部分は、『資治通鑑綱目續編』卷一の「發明」に據る。續く「宋史斷ニ曰ク、呂氏中ガ論ニ、韓通、李筠、李重進ハ、周二在ラバ頑民タラン」と述べる部分は、『宋史筆斷』卷一に基づく。ただし、それに「鄭天民ノ曰ク、韓通、李筠、李重進ノ三人」と續く部分があり、これが『歴史綱鑑補』卷二十八に見え、『歴史綱鑑補』は鄭天民の前に「宋史斷」を載せる。その後にさらに「通鑑大全ニ、廣義ガ曰ク、李筠ガ宋ヲ伐ツハ」と續くが、これは必ずしも『通鑑大全』でなくとも、『資治通鑑綱目續編』卷一の「廣義」に見える。

卷十八・八十六則の「綱目ノ斷ニ曰ク、世世貴ム所ノ者ハ、綱常ノ道ヨリ重キハナシ」とある部分は、『資治通鑑綱目續編』卷一の「發明」に見える。また、同じ則の「宋史ノ斷ニ曰ク、杜太后吾子ヲシテ」から始まる部分は、『歴史綱鑑補』卷二十八に見える。それに續く「綱目ノ斷ニ曰ク、杜后周ノ亡ブルコトハ、幼君ノ故ナリト思ツテ」の部分は、『資治通鑑綱目續編』卷一の「廣義」に見える。卷十八・八十八則の「朱氏ノ曰ク、趙普太祖ヲ佐ケテ」

の部分は『朱子語類』卷四十八に見え、『歴史綱鑑補』卷二十八もこれを引く。「餘姚ノ許浩ガ曰ク、夫君ハ元首ニシテ」の部分は今のところ許浩『宋史闡幽』に見えるのみである。ただしこれも他の書物の引用による可能性がある。

卷二十・第九十七則の「宋史ノ斷ニ曰ク、古ヘヨリ、王ヲ圖ルノ人」の部分と「宋史ノ斷ニ曰ク、太祖徐玄ヲ折イテ曰ク、」の部分はいずれも『宋史筆斷』卷一が出典であり、『歴史綱鑑補』卷二十八にも見える。

松下氏の史論の引用は太祖の即位と帝位の繼承にまつわることと、君臣關係のありかたに集中していると言え、皇帝について述べる部分は、前節において指摘した天命の強調とつながっていると考えられる。

七、「前集」と續編の企畫

上述の通り、『通俗宋史太祖軍談』の序の末尾には、「前集殘唐軍談」があり、まだ出版されていないと述べる。この「殘唐軍談」は、現存の書籍や『享保以後大阪出版書籍目録』からは見いだせず、企畫のみに終わったと考えられる。

しかしすでにこのとき、殘唐五代については通俗軍談が出版されていた。毛利貞齋の『通俗通鑑五代軍談』は寶永二年（一七〇五）に刊行されており、『通俗宋史太祖軍談』に先行する。また毛利貞齋は大阪で活動しており、當時「國字解」の類をはじめとする著作の多さによって知られており、書肆や著者が全く知らないということは考え難い。ただし、『通俗通鑑五代軍談』は題名にもある通り、あくまで『資治通鑑』によって歴史の概略を記すことを志したものであった。その序には以下のように述べて他の通俗軍談を貶める。

頃問世に行はる、通俗の類を閲るに、舊史に見えざる人名を多く造り、實無き事を間架へて、只一時覽者の意を樂しませ、其の利を己に釣らんと顧ひ、詭誕を廣め、暗昧の者の愚を益すこと、太息するに堪へたり、

松下氏がこれにあえてふれず、その上で『殘唐軍談』の企畫について書いたとすれば、それは毛利貞齋と同じような歴史書から作ったものではなく、歴史小説、おそらくは『殘唐五代史演義』を通俗軍談にするというものであった

可能性がもっとも高いだろう。もちろんこの問題については、結局『殘唐軍談』が出版されていないため、これ以上検討することはできない。

しかし、『殘唐軍談』については『宋史太祖軍談』の書中にもう一つ検討すべき部分がある。それが巻末の廣告である。巻末には、「柏原屋清右衛門」の名の後に、「通俗宋比史軍談 通俗殘唐軍談 近日出來」とある。これらの廣告にある書物はしばしば出版にこぎつけるに至らないことがあるが、序にあるのと同様に出版の企畫は存在していた證據としてみることはできる。

では、もう一つの『通俗宋比史軍談』とは、どんな書物になる豫定であったのだろうか。これについては、『南宋志傳』の續編である『北宋志傳』を通俗軍談化し、『通俗宋北史軍談』を出版する企畫があったと見ることができよう。もちろん、單に廣告に見えるのみで、しかも「通俗宋比史軍談」とするもののみを手がかりとするのであれば、付會の謗りを免れないが、『通俗宋史太祖軍談』には『北宋志傳』につながることを示すのではないかと考えられる材料が別に存在している。

卷二十・第九十三則にあたる「南漢主劉鋹奢侈 竝潘

仁美征進南漢 事」の冒頭は、原著『南宋志傳』第四十九回にはない部分を増補し、太祖が天下を統一したものの、まだ契丹と河東のみが宋朝に従っていないことを述べて、さらに以下のようにいう。

太祖趙普ト商議シ給ヒ、蜀國平定スルノ後、急ニ河東ヲ討タント欲ス、于時趙普奏シテ曰ク、河東彈丸黒子ノ地、恐ル、ニ足ラズト雖ドモ、只山後ニ楊業有ツテ、彼ガ武威甚ダ高シ、彼河東ヲ援フトキハ、正ニ圖リガタシ、陛下楊令公ヲ宥メ、恩威ヲ施シ、撫デ慰サメ、彼正ニ歸服セバ、河東何ゾ計ルニ足ランヤ、太祖其議ニ允ヒ、其計ヲ佈キ設ク、

趙普の言葉はおそらくここでは『十八史略』七卷本卷六開寶二年の條に見える、太祖に太原征伐について問われた趙普が、「臣の知る所に非ざるなり。太原は西北の二邊に當たる。一舉して下らしめば、邊患は我獨り之に當たらん。何ぞ姑く留めて以つて諸國を削平するを俟たざる。彼の彈丸黒子の地、將た何の逃るる所かあらん」と言つたことに基づいていると思われるが、ただちに攻めない理由

を、楊業がいることに書き換えている。

ところが楊業はこの後、『通俗宋史太祖軍談』には登場しない。それでも楊業についてわざわざここで述べるのは、『北宋志傳』の第五回で、太祖趙匡胤が楊家の父子を宋に迎え入れることを遺囑して崩御する場面に無理なくつなぐことの布石であることとみることができ。少なくとも、松下氏にとつて楊業の存在は、ここで書き足すに足るものだったといえよう。

『通俗宋史太祖軍談』の出版された享保年間は、まだ通俗軍談の出版が盛んに行われた時期といえるが、『南宋志傳』から『通俗宋史太祖軍談』が作られた後、享保六年（一七二二）に『大宋中興通俗演義』から『通俗兩國志』が作られて以降は、通俗軍談がそれまでのように歴史小説から次々と作られるという状況は續かなかつた。『殘唐五代史演義』や『北宋志傳』『楊家府演義』などはついに日本の讀者に廣く知られる機會を得られなかつたのである。

八、おわりに

享保四年に出版された『通俗宋史太祖軍談』の譯者瑞亭堂松下氏の來歴は從來まったく知られていなかったが、本

論により松下平左衛門、號は殷齋であり、他の著書に『古曆便覽』の増補があることが判明した。またこの松下平左衛門は著書と若干の資料から、曆學と占術をおさめた人物であると考えられる。

『通俗宋史太祖軍談』には、譯者による目立つた増補が見られる。それについて整理すれば、以下の三點となる。『水滸傳』による描寫の増加、史書に基づく記述の増加、『資治通鑑綱目』『歴史綱鑑補』などによる史論の引用の増加である。

『水滸傳』による描寫の増加については、『南宋志傳』の中にある『水滸傳』と近い場面を、『水滸傳』から引用した描寫部分を増やすことで、場面が類似することを指摘しているのではないかと考えられる。

二番目の内容は王朝の經緯と人物とくに占者の傳に分けられ、三番目の内容は王朝と君臣の道に基づくものと、天命に關わるものに分けられる。

これについては、占者術士の活躍やかれらに關する記述と、英雄が天命に導かれて皇帝の位につくことを論じた史論を増やすことが目立つ。

加えて、全書の末尾に付された「通俗宋史軍談」の廣

告と、原著にはない、楊業のいる河東の地の處遇について考える部分が増補されていることから見て、序に見える『殘唐軍談』に加えて、續編としての『北宋志傳』の翻譯の企畫があつた可能性がある。

松下氏はとくに史論についてはある程度の出典を示すものの、その他の増補部分の典據は示さない。とくに原著を知らない讀者は、譯者が『水滸傳』の文を襲用したり、占者の傳を増加したりしても、その部分が原著になく、譯者によって増やされた部分であると氣づくことは基本的にないと考えられる。

松下氏は序において「前人の術に倣ひ」と述べている。確かに『通俗宋史太祖軍談』における翻譯そのものについて、従来の通俗軍談と共通する部分を見出すことは難しくなく、その意味ではこの作品は際立ったものとはいえない。しかし、原著にない文を増補するさいに、譯者の經歷と讀書經驗を反映させると考えられる部分があることは大きな特徴である。

『通俗宋史太祖軍談』は享保年間に出版されており、その時期に譯者松下氏は『水滸傳』を読み、『南宋志傳』と比べた上で、『水滸傳』の一部を翻譯の中にしのばせてい

ると考えられる。それはこの直後の年代に『水滸傳』に關わる書物がいくつも作られ、「通俗物」全體が、通俗軍談から口語的表現の多い小説の翻譯を行う方向に向かつていったことに先がけるものであった。

また、いっぽうでもし『殘唐五代史演義』や『北宋志傳』が通俗軍談にされていたならば、より英雄物語としての色合いの濃い歴史小説を題材とする方向に向かつていたことになる。

『通俗宋史太祖軍談』は、以降の「通俗物」が進んだ方向に進まなかった方向の分岐にまたがるところに位置する作品であるといえよう。

注

- (1) 徳田武編『對譯中國歷史小説選集』所收「新刊出像補訂參采史鑑南宋志傳通俗演義題評」ゆまに書房、一九八三。
- (2) 上田望「講史小説と歴史書(二)『殘唐五代史演義』、『南宋志傳』の構造と變容」『東洋文化研究所紀要』一三七、一九九
- 九。
- (3) 氏岡眞士「南宋王の神話」『人文科學論集 文化コミュニケーション學科編』三四、二〇〇〇。
- (4) 『通俗宋史太祖軍談』の序と本文は主に家藏の寶曆十年(一二七六)後印本により、『通俗二十一史』早稻田大學出版部、

一九二一、第十卷所收の活字本を參照した。

- (5) 『通俗二十一史』早稻田大學出版部、一九二一、第十二卷所收。

- (6) 『通俗二十一史』早稻田大學出版部、一九二一、第一卷所收。

- (7) 『通俗二十一史』早稻田大學出版部、一九二一、第十卷所收。

- (8) 『享保以後大阪出版書籍目録』大阪圖書出版業組合、一九三六。

- (9) 渡邊敏夫『近世日本天文學史・上』第5章 貞享改曆後の天文曆學」恆星社厚生閣、一九八六。

- (10) 大沼宜規「岩崎文庫所藏木村正辭舊藏資料について」解説と目録(中)『東洋文庫書報』三六、二〇〇五。

- (11) 前掲徳田武『對譯中國歷史小説選集』解説。

- (12) 前掲徳田武『對譯中國歷史小説選集』解説。

- (13) 『水滸傳』における描寫文體については、川浩二「關と閨の語り―『水滸傳』・『金瓶梅』における駢語の敘述機能―」『中國文學研究』第二八期、二〇〇二において論じた。

- (14) 『水滸傳』本文は『容與堂本水滸傳』上海古籍出版社、一九八八に據った。

- (15) 『南宋志傳』本文は『明清善本小説叢刊』所收の葉混沌本影印に據った。原文「盡我忠而已」鎮之地成得甚事。術士之言不宜深信、惟盡我忠而已。」

- (16) 『通俗二十一史』早稻田大學出版部、一九二一第十卷所收に據った。

- (17) 『殘唐軍談』が『殘唐五代史演義』によって作られる可能性

があったことについては徳田武氏が前掲の『對譯中國歴史小説選集』解説においてすでに指摘している。

(18)『十八史略』本文は『新釋漢文大系』第二十一卷、明治書院、一九六九所收の活字本に據った。原文：「非臣所知也。太原當西北二邊。使一舉而下、邊患我獨當之。何不姑留以俟削平諸國。彼彈丸黑子之地、將何所逃。」

※本論文は二〇一四年度早稲田大學特定課題研究（課題番號：2014S-026）の成果の一部である。

* *

作者：川 浩二

Author: KAWA Koji

標題：論《通俗宋史太祖軍談》譯者松下氏所增補、引用の部分

Title: Additions and Quotations made by Mr. Matsushita the
Translator of *Tong su Song Shi Tai zu Jun tan* 『通俗宋史太祖軍談』

摘要：通俗軍談《通俗宋史太祖軍談》係明代歷史小説《南宋誌傳》の通俗文體日譯本。本文探討了譯者松下氏

『通俗宋史太祖軍談』の譯者松下氏による増補・引用部分について（川）

の身份經歷，還以其譯文中獨自增補的部分為中心進行了研究，得出了如下結論。譯者松下氏，尾張人，名平佐衛門，號殷齋。精天文曆法，著作《通俗宋史太祖軍談》之外，另有增補版《古曆便覽》。從《通俗宋史太祖軍談》文中增補部分，可以看出幾點特征。一、描寫風景、武裝等的增補，都轉借了《水滸傳》。二、記述人物部分的增補，其人物大多是占者術士，這可以說是譯者經歷的反映。三、引用關於王朝興亡的史論。其中強調天命的特徵，也可以說來自譯者的經歷。加之，因譯書中對楊業故事有所增補，還在書尾加載了廣告，可以推斷，當時《北宋誌傳》の日譯本也可能在計劃出版。

關鍵詞：歷史小説 史論 通俗軍談 通俗物 受容史